

ダニエル書 - 第三十三号

日曜法の布告の際に押される神の「印」：ダニエル書第6章の預言的分析

Jeff Pippenger

2023-12-28

目に見える神の「印」は、日曜法の布告の際に押される。

「私たちのうち一人として、その品性に一つでもしみや汚れを残したままでいるなら、神の印を受けることは決してない。私たちの品性の欠陥を正し、魂の宮をあらゆる汚れから清めることは、私たち自身に委ねられている。そうして初めて、五旬節の日に初代の雨が弟子たちの上に降ったように、後の雨が私たちの上に降るのである。…」

「兄弟たちよ、あなたがたはこの大なる準備の業において何をしているのか。世と結びついている者たちは、世俗の型を受け、獣の刻印のために備えている。自己を信頼せず、神の前にへりくだり、真理に従うことによって魂を清めている者たちは、天の型を受け、額に神の印を受ける備えをしている。布告が発せられ、印が押されるとき、彼らの品性は永遠に純潔で汚れのないままに保たれる。」『証言』第5巻、214、216頁。

ダニエルは獅子の穴に投げ込まれたとき、目に見える封印を受ける。したがって、この章は日曜法の布告を表している。

すると、これらの者たちは王の前に集まって言った。「王よ、ご存じください。メディア人とペルシア人の法によれば、王が定めた勅令も規定も、いったん立てられたものは変更できません。」そこで王は命じ、彼らはダニエルを連れて来て、彼を獅子の穴に投げ込んだ。王はダニエルに向かって言った。「あなたが絶えず仕えているあなたの神が、あなたを救ってくださるであろう。」そして石が運ばれ、穴の口に置かれた。王はそれを自分の印璽と貴族たちの印璽で封印し、ダニエルに関する決定が変えられないようにした。ダニエル書 6:15-17

物語はそこで終わるのではないが、始まりの地点で終局を迎える。ダニエル書6章の筋は、主として百二十人の諸侯と、その次位にある二人の総裁が主導しつつ、参事官・隊長・総督も含まれていた結託を示している。王を欺いてダニエルを迫害させるために、この五者連合が結成された。物語は彼らに対する裁きで幕を閉じる。というのも、彼らは日曜法の時に起こる特別な裁きを示しているからであり、その裁きはダニエルや王を表す者たちに向けられるのではなく、王を欺いた者たちに下るからである。

そこで王は命じ、人々はダニエルを訴えた者たちを連れて来た。そして彼らと、その子どもたちおよび妻たちを獅子の穴に投げ込んだ。獅子は彼らを圧倒し、彼らが穴の底に着く前に、彼らの骨をことごとく砕いた。ダニエル書 6:24。

預言的な筋書きにおいて、国家を欺くのは常に教会であり、第六章は王に対して行われたその欺きを明らかにしている。アハブはカルメル山で神の力の偉大な現れを目撃した後、エリヤに導かれて雨の中をイゼベルのもとへ戻った。アハブには、イゼベルが神の大い

なる力の証しに感銘を受けないと考える理由はなかったが、エリヤに対するイゼベルの根深い憎しみについては欺かれていた。アハブとイゼベルに対峙するエリヤの物語は、バプテスマのヨハネ（彼はエリヤであった）とヘロデおよびヘロデヤの物語において、再び繰り返される。

誕生日に、酔ったヘロデがサロメ（ヘロディアの娘）に王国の半分を与えると約束したとき、ヘロディアがヨハネの首を求めるとは彼は思いもしなかった。アハブであれ、ヘロデであれ、ダリウスであれ、王たちは、イゼベルの偽預言者たちの踊り、ヘロディアの娘の踊り、あるいはダニエルの物語における五重連合を通して、不浄の女に欺かれる。ピラトもまた、ユダヤの「教会」を代表していた墮落した祭司団に欺かれた。また、教会は女を象徴する。

欺瞞は預言的なシナリオの特徴であり、第三の災いのイスラムは、終わりの日に恐怖を通して国際連合を欺くために用いられる偽りである。「欺瞞」と、その欺瞞を生み出す「偽り」の双方は、神の預言のことばの中で明らかにされている。イスラムの役割と、教皇制が七つの頭に続く第八の頭となることは、終わりの日に封印が解かれるメッセージ、すなわちイエス・キリストの啓示の一部としてすでに示されている。ゆえに、ダニエル書第六章におけるダリウスの欺瞞を暴くことは、真夜中の叫びをなすメッセージの一部である。この欺瞞こそが致命的な傷を完全に癒す要素であり、その結果、教皇制を第八にして最後の王国として復活させる。ダリウスの欺瞞において、二人の背教した長官と百二十人の総督は、ダニエルと対比される欺瞞の同盟の代表者である。

百二十という数は、ペンテコステにおける神の弟子たちの象徴である。

そのころ、ペテロが弟子たちの真ん中に立って言った。（名を連ねていた者の数は、皆でおおよそ百二十名であった。）使徒の働き 1:15.

ペンテコステは、印が押されるとき「日曜法」を予表しており、ダリウスを欺いた百二十人の総督は、その日曜法における偽りの祭司職の象徴である。王を欺く者たちは、背教した二人の長官と百二十人の背教した総督という二つのカテゴリーとして示されている。その二人の長官は、預言者であるダニエルと同じ部類に数えられている。ダリウスを欺くこれら二つの階層は、偽預言者の集団と墮落した祭司の集団を表している。

「わたしの牧場の羊を滅ぼし散らす牧者たちに災いあれ！」と主は言われる。それゆえ、イスラエルの神、主は、わたしの民を牧する牧者たちに向かってこう言われる。「あなたがたはわたしの群れを散らし、追い払い、顧みなかった。見よ、わたしはあなたがたの行いの悪を罰する」と主は言われる。「わたしは、彼らを追いやったすべての国々から、わたしの群れの残りの者を集め、再び彼らをその囲いに連れ戻す。彼らは実を結び、増え広がる。わたしは彼らの上に彼らを養う牧者たちを立てる。彼らはもはや恐れず、おののかず、失われる者もなくなる」と主は言われる。「見よ、その日が来る」と主は言われる。「わたしはダビデのために正しい若枝を起し、その王は治めて栄え、この地にさばきと正義を行う。その日々にユダは救われ、イスラエルは安らかに住む。その名は『我らの義なる主』と呼ばれる。」それゆえ、見よ、その日が来る、と主は言われる。そのとき、人々はもはや「イスラエルの子らをエジプトの地から導き上られた主は生きておられる」とは言わない。むしろ、「北の地から

、またわたしが彼らを追いやったすべての国々から、イスラエルの家の子孫を導き上げ、連れ帰った主は生きておられる」と言う。彼らは自分たちの地に住む。預言者たちのゆえに、わたしの内なる心は裂け、わたしの骨は皆震える。わたしは酔った人のよう、ぶどう酒に打ち負かされた人のようだ。主のゆえに、その聖なる言葉のゆえに。この地は姦淫する者で満ち、のろいのゆえに地は嘆き、荒野の牧場は枯れ果てた。彼らの歩みは悪く、その力は正しくない。預言者も祭司も皆汚れている。まことに、わたしの家のうちにさえ、彼らの悪を見いだした、と主は言われる。それゆえ、彼らの道は暗闇の中の滑りやすい道のようになる。彼らは追い立てられてそこに倒れる。わたしが彼らに災いをもたらす、その罰する年に、と主は言われる。エレミヤ書 23:1-12

エレミヤのいう「臨みの年」は、ダリウスを欺いた共謀者たちへの裁きである。偽預言者と祭司に対する裁きは、預言のことばの主題である。そして、墮落した祭司制度がキリストに敵対するようローマ当局を先導し、欺いたのと同様に、ダニエル6章の陰謀は、まさにその預言的真理を扱っている。

ダニエル書第5章の預言の筋道は、日曜法の時に共和主義の角とアメリカ合衆国という国家に対して執行される裁きを明らかにしている。その裁きは、守りのない南の城壁から王国に忍び込んだ第三の災いのイスラムによって成し遂げられる。ダニエル書第3章における日曜法の筋は、まさにその時に、神の民が全世界への旗印として高く掲げられることを示している。ダニエル書第6章は、まさに同じ歴史において偽預言者たちに対して執行される裁きに焦点を当てている。

アメリカ合衆国における日曜法の時、背教的プロテスタントの角は二つの部類から成り、ひとつは礼拝日として日曜日を擁護する者たち、もうひとつは礼拝日として安息日を擁護しているとむなしく公言する者たちである。共和主義の角の内部におけるそれらの相当物は、民主党と共和党である。二つの背教的な角は、それぞれキリストの時代のサドカイ派とファリサイ派によって象徴されている。ダリウスを欺く際の二人の背教的な大統領と百二十人の祭司もまた、プロテスタントの背教的な角の二つの部類を表している。物語が起こった当時、彼らは実際には政治的人物であったが、予言的な文脈は、国家を欺くのは背教的な宗教権力であることを示している。

カルメル山の出来事が示すように、この物語は偽預言者を二つの類に分けている。すなわち、バアルの預言者と、木立（アシュタロテ）の預言者である。両者は、バアルが男神、アシュタロテが女神であることから、教会と国家の結合を象徴している。エリヤは最終的にカルメル山の偽預言者たちを処刑したが、ちょうどダニエル書六章の共謀者たちが獅子の穴に投げ込まれたのと同様である。

エリヤは彼らに言った。「バアルの預言者たちを捕らえよ。ひとりも逃してはならない。」彼らは預言者たちを捕らえた。エリヤは彼らをキシオン川へ連れて下り、そこで彼らを殺した。列王記上18章40節

同じカルメル山の物語においては、洗礼者ヨハネによって表されたとおりに、欺く力は娘である。両方の物語は、カルメル山で自分たちの供え物の周りで踊るにせよ、サロメが欺きの踊りをしたヘロデの酒に酔った誕生日の宴にせよ、欺く者たちを踊る者として描いている。二つの筋は合わせて、日曜法の時点で完全に形成される教会と国家の結合を示し

、さらに、アメリカ合衆国の背教した諸教会がヘロデヤの娘たちであり、ヘロデヤはすなわちイゼベルで、いずれもカトリックを表していることを明らかにする。ヘロデの誕生日は、地の獣の第六の王国の終わりを画すると同時に、聖書の預言における第七の王国（国際連合）の誕生をも画する。

まさにサロメへの約束において、ヘロデは自らの王国の半分をサロメに与えることに同意しており、これによって第七の王国が半分は教会、半分は国家という組み合わせを表していることが示されている。王国は、ヨハネの首がヘロデヤに渡されたときに始まる。このため、第七の王国は『黙示録』第17章において、しばらくの間だけ続くものとして表されている。三者連合が確立されるのは日曜法の時である。というのも、そこで十人の王たちが、自分たちの短命の王国を「一時間」だけ獣に与えることに同意するからである。その「一時間」とは、アメリカ合衆国で始まり、ミカエルが立ち上がるときに終わる、日曜法危機の「時」である。

あなたが見た十の角は十人の王であり、彼らはまだ国を受けていないが、獣と共にひと時、王としての権威を受ける。彼らは心をつにし、自分たちの権威と力を獣に与える。彼らは小羊と戦いを交えるが、小羊は彼らに打ち勝つ。小羊は主の主、王の王だからである。また、彼と共にいる者たちは、召され、選ばれ、忠実な者たちである。ヨハネの黙示録 17:12-14.

ヘロデを象徴とする十人の王たちは、第七の王国の誕生の日に、日曜法の危機の間、彼らの王国の半分を獣に与えることに同意する。日曜法の危機は「一時間」として表されている。その「一時間」に、ベルシャザルの壁に文字が記される。その「一時間」に、シャデラク、メシャク、アベデネゴは炉に投げ込まれ、黙示録第十一章の二人の証人がそうであるように、雲の中に引き上げられる。三重の連合は、人々の目の前で天から火を降らせる地の獣が行う欺きによって結集させられる。

また私は、地から上ってくるもう一つの獣を見た。彼には子羊のような二本の角があり、竜のように語った。彼は第一の獣の前でそのすべての権威をふるい、致命的な傷が癒やされたその第一の獣を、地とそこに住む者たちに拝ませた。また彼は大いなるしるしを行い、人々の目の前で天から火を地上に降らせた。また彼は、その獣の前で行う力を与えられていたそれらの奇跡によって地に住む者たちを惑わし、地に住む者たちに、剣で傷を受けながら生きのびたその獣の像を造るようにと命じた。黙示録 13:11-14.

世界が欺かれるのは、奇跡そのものというよりも、彼が行う力を持っていた「それらの奇跡の手段」によってである。「それらの奇跡の手段」という表現は付け加えた語句だが、奇跡に対する強調の置き方としては適切であり、その点は十分に注意しておくべきだ。偽りのメッセージ（天からの火）がどのように世界を欺くのかを認識することは重要である。なぜなら、私たちは今、地上のグローバリストの商人たちにより支配され、操作されている「情報スーパーハイウェイ」を通して、地球の住民が催眠にかけられているという、まさにその歴史のただ中にあるからである。その主題は後の記事に譲るが、今はただ、ダリウスに対して長官たちや諸侯が行った欺きが、認識されるべき相互に関連した要素をいくつも含む、特定の預言的テーマであることを指摘しておく。

三重の連合は、ヘロデの誕生日の宴会で、支配者たちの前でのサロメの官能的な踊りという欺きによって結集した。ピラトに押し付けられた欺きは二重の性質をもち、すなわち、キリストが国家権力に対する扇動を引き起こし助長しているという告発と、宗教的権威に対して冒涇しているという告発であった。その歴史において三つの敵対者が集まった。ローマの権力（国家）、バラバという偽キリスト（偽預言者）、そして背教したユダヤ教会（獣）である。背教した教会は、扇動と冒涇という二重の嘘で、ローマの権威（国家）を欺いた。

ついにダリウスが彼を欺いた者たちの動機に気づいたときには、彼はダニエルを獅子の穴に投げ込むことを余儀なくされた。ダニエルは神の律法への服従ゆえに国法を犯した。ダリウスに提示された嘘は、彼の誇りをおだて上げることによって仕組まれ、そのため彼は自分を欺いた者たちの動機を見抜けなかった。ダニエルと獅子の穴の物語における嘘と欺きは、神への服従を冒涇と反逆として仕立て上げるものであり、それは十字架におけるのと同じ二重の欺瞞であった。そして、十字架の道標は日曜法の道標と一致する。

人々を欺く宗教的権力への裁きは聖書の預言の主題であり、宗教的権力が国家権力を欺くという事実も同様である。

人々は自分たちが惑わされていたことに気づく。互いを滅びへと導いたと責め合うが、皆が最も激しい非難を牧師たちに浴びせることで一致する。不忠実な牧師たちは耳ざわりのよいことを預言し、聞く者たちに神の律法を無にさせ、それを聖く守ろうとする者を迫害させてきた。今や、絶望の中で、これらの教師たちは自分たちの欺きの行いを世の前で告白する。群衆は激しい怒りに満ちる。「私たちは滅んだ！」と彼らは叫ぶ。「私たちの破滅の原因はお前たちだ。」そして彼らは偽りの牧者たちに襲いかかる。かつて彼らを最も賞賛していたまさにその者たちが、最も恐ろしい呪いの言葉を彼らに浴びせる。かつて彼らの頭上に月桂冠を戴かせたその手が、今や彼らを滅ぼすために振り上げられる。神の民を殺すための剣は、今や神の民の敵を滅ぼすために用いられる。至る所で争いと流血が起こっている。『大いなる争闘』655頁。

猶予期間が閉ざされると、宗教指導者たちは、彼らの群れである信徒たちから矛先を向けられる。信徒たちが、宗教指導者の広めた嘘に欺かれていたことを悟るからである。大統領や諸侯もその家族とともに、彼らが流布した嘘のゆえに、皆同じ報いの裁きを受けた。カルメル山でエリヤが偽預言者たちを殺したときと同じ報いが、黙示録第十一章の「大地震」において、「七千人」が打ち倒されることで表されている。

その同じ時刻に大地震が起こり、都市の十分の一が倒壊し、地震で七千人が命を落とした。残った者たちは恐れおののき、天の神に栄光を帰した。ヨハネの黙示録 11:13

フランス革命における「大地震」が成就したとき、殺された七千人はフランスの王族を表していた。「大地震」の「時」、すなわち日曜法のときには、殺される七千人はローマに屈するセブンスデー・アドベンチストを表す。というのも、日曜法が到来するとき、第七日安息日の責任を理解している者だけが獣の刻印を受けるからである。

安息日の変更は、ローマ教会の権威のしるし（印）である。第四戒の要求を理解しながら、真の安息日の代わりに偽りの安息日を守ることを選ぶ者は、そうすることによって、それを命じている唯一の権威に服従を表明していることになる。獣の刻印とは

教皇制の安息日であり、それは神の定めた日に代えて世界に受け入れられてきたものである。

しかし、預言で定められている獣の刻印を受ける時は、まだ来ていない。試練の時も、まだ来ていない。ローマ・カトリック教会も例外ではなく、あらゆる教会に真のクリスチャンがいる。光を受け、第四の戒めに従うべき義務を悟るまでは、だれも罪に定められない。だが、偽りの安息日を強制する布告が発せられ、第三天使の大いなる叫びが獣とその像の礼拝に対して人々に警告するとき、偽りと真理の間にはっきりと一線が引かれる。その時、なおも背きを続ける者たちは、額か手に獣の刻印を受ける。

私たちは急速な歩みでこの時期に近づきつつある。プロテスタント諸教会が、彼らの先祖がその反対のゆえに最も激しい迫害に耐えた偽りの宗教を支えるため、世俗の権力と結びつくとき、教会と国家の連合した権威によって教皇制の安息日が強制されるであろう。国家的な背教が起こり、それは国家的破滅にしか終わらない。バイブル・トレーニング・スクール、1913年2月2日。

大地震の「時」、すなわち日曜法の時に打ち倒される「七千人」は、エリヤの時代にイゼベルにひざまずくことを拒んだ「七千人」とも対応している。

しかし、わたしはイスラエルに七千人を残してある。彼らは皆、バアルにひざをかかめず、彼に口づけもしなかつた者たちである。列王記上 19:18

最初の「七千」への言及は、イゼベルに屈することを拒んだ忠実な一群を指し示しており、最後の言及は、イゼベルに屈する残りの者を表している。ローマ教皇権が栄光の地（黙示録13章の地から上って来る獣）を征服するとき、すなわち日曜法の時に、一方の一群は「打ち倒され」、別の一群はバビロンの支配の手から逃れ出る。なぜなら、その時「バビロンから出よ」というメッセージが始まるからである。

彼はまた美しい地に侵入し、多くの国々が打ち倒される。しかし、エドムとモアブ、そしてアンモンの子らの主だった者たちは、彼の手から逃れる。ダニエル書 11:41

「countries」という語は付け加えられたものである。というのは、日曜法において「打ち倒される」のは多くの国々ではなく、多くの個々のセブンスデー・アドベンチストだからである。なぜなら、その時点では彼らだけが第三の天使の光に対して責任を問われるからだ。彼らこそが「多くの者」である。というのも、彼らは本来、神の印を受ける者たちの中に加えられるように召された人々であったが、その召しを拒んだからである。

王は彼に言った、「友よ、どうして婚礼の礼服を着ないでここにはいつて来たのか。」彼は黙っていた。そこで王はしもべたちに言った、「その男の手足を縛って、連れ出し、外の暗闇に投げ込め。そこで泣いて歯ぎしりすることになる。」招かれる者は多いが、選ばれる者は少ない。マタイによる福音書 22:12-14

ダニエル書第六章における総督たちと長官たちの欺きは、国家権力を欺く宗教権力に対する罰を明らかにしている。

そこで王は命じ、人々はダニエルを訴えた者たちを連れて来た。そして彼らと、その子どもたちおよび妻たちを獅子の穴に投げ込んだ。獅子は彼らを圧倒し、彼らが穴の底に着く前に、彼らの骨をことごとく砕いた。ダニエル書 6:24。

ダニエル書は次回の記事で続けます。

さて、これ以上何を言おうか。ギデオン、バラク、サムソン、エフタ、またダビデ、サムエル、そして預言者たちのことを語るには、時間が足りない。彼らは信仰によって諸国を征服し、義を行い、約束を得、獅子の口をふさいだ。ヘブル人への手紙
11:32、33